

病弱教育の教育情報をICTを活用して、蓄積、活用するには？

【研究の背景】

病気のある児童生徒の教育は、病弱教育を行う特別支援学校をはじめ、小中学校の病弱・身体虚弱特別支援学級、通級による指導、さらには通常の学級のすべての教育の場で行われています。そして、病弱教育を行う特別支援学校は、本校のほかに分校や分教室が設置されていることが多い状況にあります。また、病弱・身体虚弱特別支援学級は、小・中学校内だけでなく小児病棟のある病院内にも設置されています。そのため、特別支援学校本校、分校、分教室、特別支援学級が地域に点在しており、教育活動を進めていく上で、児童生徒の集団による授業、教員の移動などの面で大きな制約を受けることになります。また、教職員の人事異動が比較的短いサイクルで行われ、病弱教育に関する専門性をもった教員が養成されにくい環境にあるということなどが課題となっています。

また、病気によるさまざまな制限や制約を受けながら、病弱教育を行う特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級に在籍している児童生徒が、意欲的に授業に参加し生活することができるように環境を整えることは、極めて重要なことであります。長期の入院により家族と離れていたり、入退院を繰り返すことで友達関係を築きにくかったりする児童生徒、精神的疾患等により人とのやりとりが苦手な児童生徒、病気によって長期欠席している児童生徒等に対する教育活動に、情報通信ネットワークを用いることで、病気による制限や制約を軽減しながら教育的支援を行うことが可能となることも多いと考えます。さらに、入院中の学校教育において前籍校の児童生徒との交流及び共同学習を行ったり、病気のある児童生徒自身が自分でできることを増やすことによって、自信を持ち自己肯定感を高めたりすることは病弱教育には極めて重要であります。そのためには、病気のある子どもの教育を担当する教師が、授業時数の制限や学習空白に配慮した、より効果的な教育支援を行うための指導法の蓄積と改善を教師同士が連携して実施することは、これからの病弱教育には有意義であると考えます。

【研究の目的】

この研究では、全国各地で行われている病気のある児童生徒を対象とした学校教育等に関する教育情報を、SNS (Social Networking Service) やCMS(Content Management System)などのICT (Information and Communication Technology) を活用することによって蓄積かつ活用するためのアーカイブの在り方について実証的研究を行い、病弱教育の方法を改善することを目的としました。

【研究の方法】

1 SNSを用いた学校教育活動に関する情報の蓄積と共有

横浜市立浦舟特別支援学校、大阪市立都島小学校、大阪市立都島中学校、福島県立須賀川養護学校、沖縄県立森川養護学校を実証フィールドとし、共同研究機関である株式会社ウェストフィールドのご協力の下、それぞれの実証フィールドごとのSNSを設置し、学校内における教員間の情報共有の在り方について検証しました。さらに、各フィールドで、児童生徒が入院している病院にある学校と病室との間、病院にある学校や病室と前籍校の教室との間、特別支援学校の本校と分校・分教室の間で、コンピュータによるWeb会議を行うことが、児童生徒の教育活動さらには入院生活に及ぼす影響についても実証研究を行い、研究期間に生じた様々な事項を各SNSに教師や研究担当者が書き込むことによって、今後の実証につながる情報を蓄積することとしました。

2 CMSを用いた学校間における情報の蓄積と共有

全国特別支援学校病弱教育校長会と本研究所とで作成している病弱教育支援冊子の編集作業にCMSのひとつであるNetCommonsを用いて、全国各地の特別支援学校（病弱）で各学校にしながら、時間と場所の制限を受けないICTを活用した情報の交換、蓄積、共有の方法について検証しました。この支援冊子作成の編集会議はWeb上で行うことによって、各編集担当者が時間と場所を問わない編集スタイルによって行いました。時間と費用を使って1か所に集まって行う編集会議の機会を最小限にし、通常の情報交換、連絡等は、各編集担当者の日々のスケジュールでそれぞれの勤務校のネットワーク上のコンピュータで行うこととしました。編集に必要なデータについてもネットサーバーに蓄積され、全国どこからでもアクセスできるようにしました。この研究では、CMSとして国立情報学研究所が開発したNetCommonsを用いました。また、直接、お互いの顔を見ながら行うWeb会議には、Adobe社のConnect Professional(以下、Web会議システムと表記)を用いました。

【研究結果から】

(1) SNSを用いた学校教育活動に関する情報の蓄積と共有

大阪フィールドにおいて小学校と中学校の特別支援学級が、病院内の離れた位置にあったことから、Web会議で日常的な情報交換がそれぞれの教室から移動することなく行うことができるようになってから、徐々にパソコンを使用することに慣れていきました。とほぼ同時にSNSへの書き込みも増加し、日々の授業の様子や児童生徒の活動状況等も情報交換、蓄積されるようになりました。そのことによって、教師同士の情報共有が図られ、児童生徒の病状等に合わせた声かけ等の関わりも、これまで以上にスムーズに行われるようになりました。福島フィールドにおいては、SNSを設置したことによって、各校での学校活動の状況が積極的に書き込まれ、これまで知り得なかった他校の状況について情報共有が図られるようになりました。各校において情報共有の必要性を強く感じていた教諭がそれぞれ存在し、まずはそれらの教諭がSNSによって情報交換を行うようになったことが契機となったからです。横浜フィールド、沖縄フィールドにおいても、学校内での情報共有、学校間での情報共有が促進されることが確認されました。

SNS導入によって教員、教育委員会など学校関係者と医師、看護師など医療関係者、そしてICT関連企業とともに情報共有を図りながら、病気の子もたちの教育について検討することができました。

(2) CMSを用いた学校間における情報の蓄積と共有

CMS等を用いた学校間における情報の蓄積と共有に関しては、病弱教育支援冊子を平成19年から作成し始め、本研究所HP上からダウンロードできるようにしました。編集作業に用いたCMSは、国立情報学研究所が開発したNetCommonsでした。NetCommons上には、各執筆担当者が作成した文書ファイルを蓄積することができ、そのファイルの閲覧、加筆を許可された者だけが、インターネット接続環境があれば時間と場所に左右されずにアクセスすることができます。さらに、意見交換等をネット上で行うことができました。併せてWeb会議システムであるAcrobat Connect Proを用いて、複数箇所からの参加者による、顔を見ながらの会議も実施しました。このような取り組みの結果、平成19年度は「白血病」、さらに平成20年度は、「脳腫瘍」と「筋ジストロフィー」の子どもへの教育支援冊子を作成することができました。

病弱教育支援冊子のURL <http://www.nise.go.jp/portal/elearn/shiryou/byoujyaku/supportbooklet.html>

【これからの取り組み】

医療改革の中で、小児科病棟が急速に減少しており、病気の子もたちを取り巻く環境は大きく変化しています。また、病気のある子どもへの教育である病弱教育の在り方にも大きな影響を及ぼしています。

病弱教育の意義として、病気のある児童生徒の学力向上、積極性・自主性・社会性の滋養、心理的安定、病気に対する自己管理能力の育成等があげられます。これらの意義を踏まえ、今後、入院等によって病院にある学校に転学することとなる児童生徒の前籍校との連携、病気を理由に長期欠席している児童生徒への教育アプローチなどICTを活用した病弱教育のシステム作りを進めていきたいと考えています。



製作した病弱教育支援冊子

本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名（研究期間）】

共同研究 病弱教育におけるICTを活用した教育情報アーカイブの在り方に関する
平成19年度～20年度

【研究組織／問い合わせ先】

研究代表者
滝川 国芳
(メールアドレス takigawa@nise.go.jp)
所内研究分担者
西牧 謙吾 太田 容次
共同研究機関
株式会社 ウェストフィールド